

聞法 虚に往きて實に歸れ

一 忘れてならぬ聞法の態度

聽聞は如來の慈悲を領得する唯一の便法である。既に人生に驚き、自己に目覺め、求道の旅にある者、須らく心を空虚にして、如來の教法に全心を耳傾けねばならぬ。唯夫れ「聽聞を心に入れ申さば、お慈悲にて候間信を得べきなり」。「佛法は大切に求むるより聞く者なり」。而してその聞かや「何も同じ様に聞かで、聽かば角をきけ、詮あるところを聽け、一つことを幾度聽聞申すとも、珍しく初めたるやうにあるべきなり」とは、是れ蓮如上人の御訓言。

他力の宗教では、この聽聞といふことが、非常に重ぜられてある。「聞かといふは信心をあらはすみのりなり」といふ、祖師の言さへあつて、その聽聞は汎爾のものでなく、眞劔に徹底したものでなくてはならぬ。「聞かといふは衆生、佛願の生起本末を聞きて疑心あることなし、之を聞かといふ」とは千古不磨の斷案である。従つて「聞其名號」は即ち「信心歡喜」であつて、聞即信と云へる。されば聞に就て、三種を大別することが出来る。曰く信前、曰く信當體、曰く信後。一は信仰に至るまでの汎爾の聞様にして、二は善知識の言の聞えた下に、歸命の一念發得したのを云ひ、三は後念相續の厭足なきものである。

天保八年の大飢饉に、京阪の地多く飢餓に迫る者あり。大阪の富家慈心深くして、毎日施米し、毎夜粥を煮いて車に積み、自ら粥やらうくと呼び歩く。而して同じその聲を聞き乍ら、氣質境遇に因つて聞様色々に分る。「粥遣らう聲を子供の添寝哉」。自分が飢て居ないから貰ふ心がなく、却つて道具に

使ひ冷笑して居る。地獄ときいてはクスく笑ひ出し、極樂と聞いてはソロ／＼逃げ出す。「粥やらう聲聞きながら遠慮する」。空腹はある貰ひたうはあ
る又耻かしようもある。我身の一大事が氣に懸り、聞いてみたうもあり耻か
うもある。出たり引込んだりの聞分際。「粥やらう聲は空吹く風の音」。慈
悲深い人よ結構の事よと聞きはすれど、貰ふ心も施す心も起らぬ。御慈悲は
大切と聞けど受くる氣も起らぬ聞知分際。「粥やらう聲をたのむや飢人」。我
身の飢餓淺間しさに矢も楯もたまらず、遣らう助けう聲に飛出して、たのみ
になつたが聞即信の一念。「粥やらう聲きいたまゝあとの味」。お慈悲の粥に
腹がふくれて、嬉し辱なの信後相續。斯様に五段を分つことが出来る。扱
私供は孰に相當するであらうか。

「虚く往きて實て歸れ」空手に來りて實を持ち歸れ。身心脱落、脱落身心。
自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、とても地獄は一定すみかぞかしと、脱落し
きつて、空手になつた處、そこに大法の聲は聞えて下さるのである。『四十華
嚴經』に曰く「寧ろ惡道にて多劫の苦みを受くるとも、佛名を聞かん。善道
に生ずるも、暫時も佛を聞かざることを願はず」と。餅を頬張つた上に、尙
菓子ねぢこむことは出来ぬ。至心信樂己を忘れてとは、正に是れ。

二 勝手聞き、得手聞き

兵隊嫌ひの男が外國に居たさうな。一つ聾者になつて甘く検査を誤魔化さ
うと、何を云はれても返事せずポカンとして居る。軍醫先生、誰も居ない一
室に導いて對座し、透聲で「お前ほんまに聾者か」と云へば「はい左様でござ
います」と、透さず答へて化の皮が現はれたとか。人は至つて勝手聞をし、
勝手聾者になりたがる者である。

昔は汽車がないから馬に乗つて旅をする。馬方が喋舌出した。「モシ旦那、

世間には随分途方もない奇妙な事もありますよ。昨日乗せた旦那は珍らしく偉いお方で、賃錢はもう定めたが、思へば餘り安すぎる。酒代は別にやるとして、此處でも一つ飲めと仰しやつて、途中一休して確り振舞はれた上に。コリヤ馬方、貴様一日馬を引き乍ら歩いてさぞ草臥れたらう。是から乃公は下りて、其の代りに貴様を乗せてやらうと仰しやる。厭ひですと言つても聞きなさらぬ。旦那が態々手綱を執つて引いて行かつしやる。遂々宿まで行くと、貴様馬に乗つて、さぞ尻が痛くなつたらうと云ふので、乗賃まで下さつた。何と偉い事ぢやありませんか。馬上の客は知らぬ振して、空軒をかいて居る。「旦那危い、お起きなさい」と云はれて、漸く氣の付いた振をし、目をこすりながら、「あんまり馬が遅くて埒が明かぬものだから、つひ眠氣がさして来た。昨日乗つた馬は良い馬であつて、馬方も亦とんと氣の善い男であつた。その馬方が云ふには、旦那は恁んな早い馬に乗りなされて、今に落ちようか、コリヤ滅多に眠つてはならぬと心配してゐなさるだらう。夫が氣の毒でなりませぬから、もう賃錢は貰ひますまいと云つて、途中の宿へ來ると、旦那は馬の鞍で腰が痛みませう、ちと下りてお休みなさい。若し酒でも召上るなら酒代は此方から上げませうと云つて、散々酒を勧め。それから約束の所まで來ると、先の宿まで送つてあげたいが、私の馬は跳ねますから外の馬を取代へて行かつしやれ、駄賃は私があげませうと言ふたが。あんな氣のよい馬方もないものだ」とやるので、馬方は歩きながら、眠つた振をする積か「ゴウくムニアく」。

恁んな事は何時迄も聞いては居られまいが、折角親切に言うて下さる善知識の御言、何故にそれが耳に入らないのか「教語を以て開示すれども、信用する者少し」。嚴しい御意見ではありませんか。

三 聞かず嫌ひ、知らず誇り

子供に食はず嫌がある如く、大人に聞かず嫌がある。子供は食うて見もせず、頭から嫌ひぢやと云ふ。聞いてみもせず、てんから嫌ひぢやと云ふ。聞かうともせず勝手に、恚んな者だと定込んで居る。「俺供が若い時は、鶏が能く歌うて時刻を知らせてゐたに、此頃の鶏は横着になつて、一向歌ひもせず欠伸ばかりしてゐる」と或老人は歎いた。奚ぞ知らん。鶏が鳴かないのでなく、自分の耳が聞えないのであらうとは。自分の耳の遠くなつたのを忘れて、鶏を責むるとは、ちつと方角違ではなからうか。「それや聞えませぬ傳兵衛さん」と云ふが、そんな事を云ふてゐるのが、餘程聞えないのだ。鶏を責むる前に自分の耳を改めよ。傳兵衛さんを虐める前に、自分の道理に暗きに驚け。

宋の代に張天覺と云ふ人があつた。張商英とも稱し無盡居士とも號して仲々の豪傑。或日寺に行つて大藏經を見れば、七千餘卷もある大部物が帙に入れて、立派に棚に飾つてある。自分の崇拜する著書は『論語』十卷位で、到底比較にはならぬ。癩に觸つて堪らない。早速家に歸つて物思に耽る。「何故、今夜に限りそんなに沈思なさるので」と細君に聞かれ、「少し思ふ仔細あつて無佛論を書かうと思ふ」と答へるなり「既に無佛と云ふ、それなら最早論ずる迄もありますまい」と、鋒先を摧かれて、それきりになつた。後、友人を訪うてフト机上を見れば『維摩經』が載つてある。何心なく手に取つて一二枚讀んで見ると、なかく面白い。借りて歸つて眞劍に讀んで居る。「何を勉強なさるので」と細君に不審がられ、「イヤ『維摩經』というて維摩居士と云ふが佛法を説いた書である。至極面白い」。「サーさう云ふ書物を好く讀んだ後無佛論をお書きなされたら宜しう御座りませう」。云はれて流石の張天覺も

慄然として。已來熱心に佛教を研究し、非常な佛教信者となり、心血を濺いで書著した書物は、無佛論でなくて、却て『護法論』三卷であつた。

佛法は聞かねば解らぬ。聞けば聞く程解つて来る。解れば解る程聞きたくなる。「佛法は大切に求むるより聞く者なり」。聞かずに居ては話にならぬ。

四 矢鱈聞き、聞き過ぎ

さりとて餘に耳が長く、無暗矢鱈に聞き過ぎてても、食過と同じで困つて了ふ。彼處のお稻荷様は效驗がある。オイソラ一寸參らうか。彼處の藥師様は靈驗があらたかな。オイソラ參らねばなるまい。何處の何誰が云何、此處のこなたが慙うと、そればかり追廻しては、結局自分には何物をも得ることが出来なくなる。

宗教利用論者は、同時に併用論者になり易い。人動もすれば云ふ。佛教もよい、耶穌教もよい、儒教も結構である。神道も大切である。回々教も天理教も何も彼も、どの宗教も、皆有益の宗教である。されど夫々皆善くない所もある。夫故、自分は其の多くの宗教の短所を除けて、長所のみを取用ひやうと思ふ。唯一の信仰に憑らねばならぬなど云ふのは、全く頑固の思想である。然り言は殊に美を盡して居らうが、事は全く崩れて居る。そんな宗教は、そこら中から寄集めの材料を以て繼ぎ合せた、血の通はぬ不具にされた死骸に過ぎぬ。そんな者が何にならう。却て自ら損し他を害ふばかりである。

私の宗教は、私が唯一個であるだけに、唯一つでよい。私が宗教を信ずるのは、その唯一の宗教が有難いからである。偏にこの私のために御骨折下さるゝ、如來の御親切がやるせなく、慈悲が切なさに信ぜずに、居られぬからである。任せずに居られぬからである。信じ任すのは、其の時の都合でもなく、驅引でもなく、間に合せでもなく、誤魔化しでもない。全く如來

の眞實に動かされたのである。固より國のためでもなければ、家のためでもなく、成功のためでもなく、名利のためでもないが、信ぜられ任せられてみれば、同時に自ら一切のためになつて下さる。此の場合に於ても、頗る謹嚴の態度を以て、廣く聞かず深く聞け、徒に道行に迷はされずその堂奥を衝け。

近くの町へ驢馬を賣らうと、空馬牽いて出かけた親子連れ。間もなく小學校歸りの小供の一隊に出逢つた。饒舌つたり笑つたりしてゐる中の一人が大聲で「オヤマあ、彼の人達を見よ。空馬をひいて歩く。どちらか一人乗つたら好きさうなもの。變な事をするネ」と云つて通り過ぎた。由來耳早の氣早の親爺。早速に息子を乗せ、自分はさも嬉しさうに歩んで行く。すると間もなく、何かひそく話をしながらやつて来る、一群の老人に行逢つた。一人が連の者に向つて「ソラあの通り。私が今言つた事の證據はあれです。今日は文明とかで、老人が敬はれる處か、何時も凹まされてゐます。あれを御覽なさい。年寄が歩いて若い者が乗つて居る。何といふ不埒な奴でせう」と云ひながら、息子を睨みつけて「降りよ不幸者、親の足を休めぬか」と、さも憎さげに云ひ捨て、通り過ぎ、「親虐め、親泣かせ、あれで平生も思ひやられる」などの聲も續いて聞えた。「成程これでは息子の爲にならぬ」と思つた親父殿。息子を降ろして自分が代つて乗つて行く。暫くすると、今度は何だかよく饒舌る子連れの女共が向ふからやつて来て、通り違ひに口を揃へて云つた。「オヤ何と云ふ酷いお爺さんでせう。自分一人好い氣になつて乗つてゐる癖に、まだ年も行かぬ子供を歩かせて、可愛想に。一緒に乗せてやればよいに……」。

それも左様だと思つた親父どのは、息子を尻馬に乗せて町の近くまで来る

と、半分は冷かして一人の町人。「お爺さん、その驢馬はお前のかへ」。「はい左様です」。「ほんまかへ、餘り酷いぢやないか。人は自分の驢馬なら、そんな酷い事はせぬ筈だから、私は屹度借物だらうと思つたよ。二人で乗る代りに、何故驢馬を擔いでやらないの」。折角自分の驢馬、借物と見られては大變、賣物に瑕がつく。「へいそんならあなたの仰しやる通りにしませう」。二人は共に降りて、驢馬の四足を一つに引ツ縛り、棒を通し親子がウんく擔いで、汗水流し町の入口の橋の中程まで来た。處が何物かと大勢の見物人が集まつて、囃立て、大聲に笑ふ。笑はれる二人よりも、吊り下げられた驢馬が驚愕して騒ぎ出し、どたばたしたものだから堪らない。繩は切れ棒は折れて、驢馬はざんぶと河の中へ轉げ落ち、グツと一息に死んで了つた。途方に暮れた親子、間拔顔して「何だ馬鹿々々しい。骨折損の草臥儲か。お負に折角の驢馬まで臺なしにして了つた」。

「仰ぎ願はくは一切の行者等。一心に唯佛語を信じて、身命を顧ず、決定して行によりて、佛の捨てしめたまふ者は即ち捨て、佛の行ぜしめたまふ者は即ち行じ、佛の去かしたまふ處は即ち去く。是を佛敎に隨順し、佛意に隨順すと名づく。是を佛願に隨順すと名づく。是を眞の佛弟子と名づく」。「我れ是利を見るが故に是語を説く」と仰せらるゝ、佛の語を信ずる。これが私の忘れてならぬ聞法の態度である。四重の破人が何であらう。異學異見の説が何であらう。別解別行人の聲が何であらう。「九十五種世をけがす、唯佛一道きよくまます」。我は唯お淨土に待つてござる阿彌陀如來の仰せを聞くばかり、信ずるばかり。世の喧騒に惑はされてはならぬ。世の人込に誤魔化されてはならぬ。比喻因縁だけを聞いて合法を忘れてはならぬ。「誠に佛恩の甚重なるを念じて、人倫の喞言をはぢず」。茲に滾々として大法の泉は湧き來る

ではありませぬか。

世の中は或點まで悟りが好いと云ふ風でなくてはならぬ。早呑み込の早合點では困るが、所謂機敏に物事を見て取らねば、人に後れを取る。そこになると「世尊拈華迦葉微笑」と云つた風に、禪宗の人は流石に悟りがよい。白隠禪師などは、向ふの山に煙が見える、火があるなど悟る位では鈍い。直に摺鉢があるなど位に、いかねばならぬと申された。例の蜷川親當が悍馬に鞭打つて、京都から南へ向けて疾走して行く。向き合ひに歸つて來た一休和尚出逢頭に「何處へ行く」と聲をかけた。答へる暇もあらばこそ、馬の走るに任せて遂に行過ぎ、ぱつと扇廣げて高く差上げた。と同時に禪師は聲を勵まして「字が違ふ」と叫ばれたその機敏なこと。解りましたか。扇を揚げたのは鳥羽へ行くと知らせたのだ。扇は戸と羽と二字合せたのだから、開けばトバと讀める。處で本眞のトバ村は、戸の羽でなく鳥の羽と書くから、禪師は字が違ふぞと云はれた。

眞宗の人も機敏でなければならぬ。悟が鈍くては困る。地獄と聞いては笑ひ出し、極樂と云うても「そんな處へ誰が參るのかへ」「棺桶を見ても」「こんな桶に何を入れるのかへ」ではならぬ。南無阿彌陀佛と聞いたら、あははや我往生は成就しにけりと合點するがよい。私が迷うてゐるのは、助けて呉れとの事かと、悟りよくも承知して下された如來様が、開いて下された往生の道かと、悟りよくもお受けして。助くるぞの聲をハイと受け込んで、字が違ふぢやない約束が違ひます。火の坑へ落つる奴が極樂とは、仕合者でございますと喜ぶのである。たゞよくよき人の仰せを聞きて、信ずるばかりであります。

五 聞き心配、聞き怖れ

信仰とは不動地に基くことである。不退轉に住することである。あやふやな不徹底な、若存若亡の幽霊みたやうなものでは、決して眞實に聞いたのではない。一たび目の覺めた者ならば、自分の罪惡に氣付いて驚き悲しむと共に善根を積みたいと努力する、而して内心に善と惡とを兩立さして、惡の退かぬのを見ては悲しみ、善の起るを見ては喜び、何れも之をあてにして、之から超越することが出来ぬ。そのため何時も、戦々兢兢々として、不安ならざるを得ない。所謂、罪福を信ずるとは是である。善にも惡にもびくつく此の心が、焉んぞ知らん、其のまゝ如來救済の目標であらうとは。我が善も及ばず我が惡も恐なしと、大悲に徹底した時、此心は安住を得て、最早何者にも動ぜぬことになる。善につけ惡につけ、共に喜び勇むことの出来ることゝなるのであります。

縁起のよしあしに只管氣を揉んで居る老爺さんが、大根蒔きに出かける途中、隣の娘に出遇ふた。「花ちゃん何處へ」。「齒を虫が食うて痛むからお醫者へ……」。「何だいまくしい縁起でもない、大根蒔きに行くのに齒を虫が食ふなんて、大根の葉など虫に食はれてたまるものか、今日は止めて明日にせう」。「翌日また出かけると、知合の男に出遇つて、二三世間話をして居ると、風が吹いて、其の男の手拭を肩から落した。拾つてやると男は、何氣なく「はぐかりさん」と云うて御辭儀する。老爺さんギツクリ癩に障つた。「エ、また縁起でもない。大根蒔きに行くに、葉ばかりとは何事ぞ。大根が葉ばかりで根が入らなんだら云何する。今日は見合せて明日にせう」また歸つた。翌日、今日は誰にも逢はねばよいがと思ふと、都合よく畑までは誰にも逢はなんだ。今日こそはとセツセと大根蒔きして居ると、村長さんが偶然通りかゝられた。

「八兵衛さん偉いお早いなア」。「ハイ有難う。村長さん今日は何も云うて下さるな、一生の頼みですが。一昨日は隣の花ちやんが、齒を虫が食ふといふのに出遇つて、大根の葉を虫に食はれては堪らぬと見合せ。昨日は隣村の男に手拭を拾つてやつて、はぐかりさんと云はれ、大根に根がなくては大變とて止め。今日は三度目、もう時機も後れたから、縁起でもないことを云うて下さるな、一生のたのみ……」。「八兵衛さんの御幣擔にも却つて愛嬌がある。今時分そんな事を云ふ者がありますか、そんな事は根も葉もない事ぢや」。「ナニ根も葉もない」。八兵衛さん怒つたの怒らないの。眞赤になつて、鋏も抛つたらし、種も蹴散らしてズンぐ歸つて了つた。「ヤレく今年は大根が目茶々々になつた。折角大根蒔いて根も葉もないで云何する、止めたく」とさ。随分變な老爺さん。

折角の御教の眞意も得ず、徒に罪福を信じて機嫌に陥るビクく者は、この老爺さんと好い仲間だ。恚うすれば自力、彼あすれば他力の。此の罪が此の障が云何の。喜ばれるの喜ばれぬのと、一言一事にびくつく者は、御慈悲も抛つて眈で逃出すことになる。讃岐の庄松曰く

庄松そのまゝ有の儘、國は讃岐で彌陀は見拔で。

自身は現に是れ罪惡生死の凡夫と目の覺めた時、疑なく慮なく彼の願力に乗ずることが出来る。聞けく、自己を空虚にして聞け。

六 半途聞き、胡魔化し聞き

人の噂にも幾分の眞理はあらうが、さりとて之にばかり拘泥り果てゝは、到底何事も出来ませぬ。一旦自分の主義方針を定めた上からは、何處々々までも之を貫徹せしめねばなりません。一心は何にでも必要である。一心になつて出来ぬことはない。一滴々々の雨垂が石を穿つのも、屈托なく落ち通す

からのこと。日光も一點に集むれば、能く木を焦し火を出す。強い者も力を分くれば弱くなり、弱い者も一つに固まれば強い道理。世に一心ほど恐ろしいものはない。力の弱きを歎ずる勿れ、仕事の出来ぬを悲しむ勿れ。一心になれぬのを残念に思へ。道に進んで道を求むる、難中の難とは、この一心になれぬ人のことである。一心正念にして、本願一實の白道に慕進する。そこに易行易修の大道は展開せらるゝのであります。

世には迷信と云はるべき種々の雑行雑修がある。「延命を祈る間も減る命」祈つても焦つても、命は減るだけは減る。その代り無闇に減りはせぬ。とはいへ、うっかりすると無くなることはありませんぞ。世の毀譽褒貶に耳をかし、自分の執るべき最善の道を忘れてはならぬ。「火と水とその中道をゆけよ人、來れと喚ばふ聲をしろべに」。「攝取不捨の眞言、超世稀有の正法、聞思して遲慮すること莫れ」如來の仰せ一つを聞きさへすればよい。そして徹底して底に届く聞方をするのであります。彼方に聴き、此方に聞き、自督の可否につき去就に苦める人を、讃岐の庄松、論して曰く「佛照寺様も得雄寺様もお浄土は持つてござらぬ。其の持つてござらぬ人の言ふ事に迷はずと、御て明、穿ち得て妙と申す外はない。

蓮如上人は、つねに聴聞はかどを聞けくと、仰せられましたが、聞法は深く底を窮めねばなりません。山寺の和尚さん豆腐が好き。降つても照つても豆腐がなくては日が経たず、豆腐の買置はならぬので、毎日々々小僧を豆腐買ひにやる。通路に小店があつて、芋や大根を列べて居る。店の隠居さん、どつかと据り込んで居ても、一向買手がない。隠居さん退屈まぎれに、何時も小僧を捕へて問答をしかける。「小僧さん何處へ行く」「町へ行く」。

何處へ行く」毎日の事で解り切つて居るけれども仕方がない。答へぬ譯に參らぬ「豆腐を買ひに行く」と答へる。「今度の和尚は云何もならぬ、毎日〳豆腐ばかり買うて、少しは芋や大根も買ひなはれと、云ふてくれ、前の和尚はよく買うてくれなさつたに……それでない」と今度は通さぬぞ」と、痛くやりこめました。サア大變明日から豆腐買ひに行けない。行けないとあつては第一師匠にすまぬ。止むなく翌日は打明けて、和尚さんの智慧を借りた。「よし〳それでは、今度隠居が何處へ行くと問ふたら、俺は出家ちや西方へ行く」と云へ。西方は何處へ行くと問ふたら極樂と云へ。「宜しうございます、今度は親爺みんごと遣ツつけてやります」と、和尚が「待て〳まだある」と云ふのも聞かず、小僧さん早速飛び出して仕舞つた。今日は前日に變つて大元氣だ。例の小店の前を知らぬ振りして通ると、隠居忽ち一聲。「小僧さん何處へ行く」。小僧は〳〳ぞとばかり、「俺は出家ちや西方へ行く」。さて今日はチト様子が違ふぞ。「西方は何處だ」。「西方は極樂へ行く」小僧さん得意満面。そこを隠居さんすかさず「極樂へ何しに行く」とやつた。しまつた其處迄は聞いて置かなかつた、云何しやう、エイ仕方はない「豆腐を買ひに行く」。聞きかぢりの半可通は、恁んな風になつて了ひます。

こんな場合に人は能く胡魔化しをやる。胡魔化して胡魔化し終せたら結構であらうが、そんな甘い調子にゆかぬ、結局自性を顯すことになる。香樹院師曰く「死ぬまいと思つて居るうちに死ぬる。眞宗の者は地獄へ墮ちはせまいと思つて墮ちる。他宗のものは業がつよくて墮ちる。佛法を知らぬものは地獄はありはせぬと思つて墮ちる」と。結局墮ちることは必定である。幾度も〳〳人に相尋ねて、愈得心のゆくまで聞いて安堵の身とならねばならぬ。

七 聞いたか風の早合點

物は半途聞では困ると共に、早合點の半可通では尙困る。生兵法は大怪我の元ぢや。聞いたか風の我心得顔は、信仰上以ての外の禁物である。『維摩經』の中に、佛法を聞くことの出来ぬ八種の困難を數へてある。地獄にをるため畜生にをるため、盲聾 瘖のためと云うやうに、八難を出してあります。その一に世智辯聰の難といふのがある。これは世の中の事にあんまり賢く、智慧もあり、辯舌もまはる、一寸物わかりのよい人は、却つて佛法を聞信することが六ヶ敷と申されたのである。解の早い小才のある人は、深く我身に思入ることもせず、しんみり御法に耳を傾けないで、只才に任せて當場を云ひ抜け、胡魔化しをやる。よくはわからぬでも、そこくに早合點して、どうかかうか世間を甘く胡魔化す事の出来る質の人は、世間向はよくても、信仰上には駄目である。人前は甘く胡魔化すことは出来ても、自分を胡魔化すとは出来ぬ。自分はよし一時胡魔化しても、生死交叉の押し詰つたギリぐの時になると、最早胡魔化しはきかぬ。悔懼交々至ることは請合であります。海老は初白いが茹ると赤くなると聞いて、すればあの鎗の柄も茹いたのかと思ひ。種物の袋には、夫々名前を書付けて置けと命ぜられて、「此の中に親爺あり」と蚊帳に書付けた小供や。頭と顔との區別は、髪のある處が頭で、髪のない處が顔だと、先生に教はつて祖父の禿頭を眺めつゝ、「可笑いく、祖父ちゃんの顔は後に廻つてゐて、額は無茶に廣く頭はない」と云つた様なのが、聞嚙の半可通と云ふもの。矢張りこんな素賢い子供が文字を習ふとて、先生に一二三を教へられ、一の字は横棒を一本、二は二本、三は三本と聞くなり、「先生もう解りました、四は四本五は五本でせう」と云ひざま飛んで歸つた。「お父さん私はもう字は皆覺えた、何でも出来る」。「そんなら手紙を書

いて呉れ、隣村の萬兵衛さんにやる。「よしきた」と一室にかぐんだが半日
経つても出て來ぬ。何をするかと親爺さん「もう手紙は出來たかい」と室を覗
き込めば「未だく。一體萬兵衛なんて、あんまり數が多過ぎる、一生懸命
棒を引いても、やつと三千三百三十三しか出來ぬ。この有様では二三日は掛
からう」と云つたさうな。

任せよとあるから任せました、任せたら氣樂なものですと、重荷を下した
感じもなければ、安堵した思もないのは、任せたのでなく放つたのである。
信任は放任と違ふ。そんな處には自力もないが他力もない、全くの無力であ
る。只で助けてやるとの仰せなれば、念佛でも稱へて功德を參らせたなら、
餘計に助けて下されると心得。腹が立つても慾が起つても、お慈悲々々と片
付ける様なのは、數字は棒を引きさへすればよいと心得た様なもの。
初めから疑のかゝらぬ聽聞なら贗物である。まだ大事が懸らぬのである。
本當に大事が懸つたなら疑ふが當然である。疑ひ疑ひて、疑ふことの出來ぬ
やうになつて、茲に初めて信仰が得られたのである。夫迄は聽聞を心に入れ
ねばならぬ。

八 聞えた振の不徹底

聽聞は眞劍でなくてはならぬ。そして聞いたお謂が、すつくり自分のもの
にならねばならぬ。煙草の煙を吹きかけられたやうに、煙に巻かれたばかり
では、其處ぎりで本の木阿彌になつて了ふ。御教化のお言が、一々身を切り
刻む如く、キビくこたへて來ねば、眞實大事のかゝつた聞き様でない。ヤ
レ易行だヤレ他力だと云ふと、いかにも容易やうではあるが、本當にこの易
行が味はれ、他力が味はれるのは決して容易な事ではない。おいそれと、あ
んまり上走のした聞きやう解りやうでは、本當に聞いたとも解つたとも云は

れぬ。如來の御慈悲が、ぞつこん身に沁み徹りて、差引ならぬ處に至るのである。

家に鼠が澤山あて荒れて仕方がない。是非とも其の鼠を捕へねばならぬと愈榊落を仕掛けた。一升榊を膳の上に蓋のやうに置いて中に米を入れ、少しく鼠の這入る様に一隅を開けて置き、鼠が這入ると其の榊が落ちて、鼠が蓋されると云ふ仕掛なのである。此の方法で一晩経つて朝行つてみると、甘く落ちてゐます。中で奴さん頻と騒いでござる。主人は中へ手を入れる譯にも行かず、又其儘にもせられず、両手に支へてしつかり振つた。上下左右四五回振つて音もしない様になつた。開いて見れば、こは如何に、大きな白鼠目をまはしたものが死んだものか、ぐんにやりして居る。主人は顔色かへて「しまつた、あゝしまつた。白鼠様福の神様、誠に濟みませんことを致しました、何卒蘇生つて下さいまし、只さへ貧乏な此家、福の神様まで酷い目に逢はして、あゝ勿體ない、申譯がない……」頻りに御詫して居る處へ、鼠は目を醒ましたものか、ぐつと頭をもたげた。「オ、御氣が付きましたか、お有難い、早くくお早く御全快あそばす様に……イヤ起きられましたか、しつかり遊ばす様に……」下らぬことを並べて居る間に、鼠は身慄して榊を飛び出し、襖を傳つて鴨居に上つた。主人、畏るく拜み上ぐれば、こは如何に。今迄白鼠であると思つたのは普通の鼠であつた。「これは怪しい、福の神様が姿をお變へ遊ばした、オヤク」と云つて居ると、傍に見てゐた女房、たまりかねてグツとばかりに噴出し、「マアあなたは何を云つてゐられます、その榊では昨夜米の粉を量りましたのに。白鼠と見えましたも道理、榊を振られたから、鼠が粉まみれになつて居たのでせう」と横鎗をつかれて大笑になつたどや。

私共も此の鼠のやうに、折角の御教化を振り落さねば幸であります。昔は信者が不信者の間にまぎれて、一向に信者の風を見せず極樂に往生したと云ふ。今は不信者が信者の間にまぎれて、一向に信者振を見せかけながら地獄に落ちる者がありはすまいか。蓮如上人は其の籠を水にひて、置けと仰せられる。成程籠を水の中へ浸して置けば、籠が水の中にあると共に、水が籠の中にある。お慈悲の水の中につかつてゐる身だと感ずる時、お慈悲が胸に波々と湛へて下さる。塗物は剥げる、付けたのは落ちる。生地に限る。この生地と一體になつたお慈悲が有難いでないか。

九 耳か心か自慢か

すべて自慢はあまり見つとも好いものではありませんが、所謂信者の聴聞自慢ほど、信仰上厄介なものはありません。

或信者が死んで極樂に参り、七寶樹林の木の間を通りて、八功德水の池の側を過ぎ、阿彌陀如來のお側近く至ると、金銀珠玉の立派な莊嚴。いづれも目を奪ふばかり。それに瑠璃・玻黎・磲磈の三段の結構な棚がある。上の棚には澤山な田蚰に乾物、中の棚には數多の木海月、下の棚には仰山な數の子が積み重ねてあります。信者はこれを眺めて不審でたまらず、「極樂の御馳走は百味の飲食と申して、それはく御馳走と聞いて居たのに、さては嘘であつたか。但しは極樂にも近來は勤儉力行と云ふのか、それにしても精進でありさうなものに、魚氣のあるのは合點がゆかぬ」と、案内役の觀音様に聞けば「あれは田蚰や木海月や數の子ではない。娑婆の人間には目先ばかりで佛像を拜んだり、耳先だけで説教を聴聞したり、お有難うござります南無阿彌陀佛と、口先ばかりの御領解を述べる、僞信者が多い、さう云ふ者等が死ぬると、肝心の魂は眞先に地獄に行つて了ひ、佛像を拜んだ目と、説教

を聞いた耳と、念佛を稱へた舌とが、極樂へ參つて來たのぢや。あの田蚰と見えるは目玉の乾物、木海月と見えるは耳の乾物、數の子と見えるは舌であるぞ」と説明せられて、信者は成程と感心したさうな。

目先の禮拜、耳先の聽聞、口先の領解出言、誠にたよりないではないか。姿形に佛縁を結んでも、心に結ばねば所詮もなく。耳に聞いても心に聞かねば甲斐もない。「聽聞心に入れ申さんと思ふ人はあり、信をとらんずると思ふ人なし」とは蓮師の御悲嘆。大様に聞くでない、自慢に聞くでない、道具にするでない。只管我身の一大事と心得、「解脱の耳をすまして、渴仰の首をうなだれて、之を懇に聞きて、信心歡喜の思をなすべし」。

十 能く聞くことは至難である

何時の間にか傲慢が頭をあげたがる。聞いたか風に澄まし込みたがる。全く謙虚の心に任せねばならぬのに。水戸黃門光圀卿が諸方を微行せられて或處を通られると、大道に蓆を敷いて、通りがりの人々に、若干かの錢を拂はせて、大きな金鎚で自分の頭を打たせてゐる、不思議な男を見られた。金鎚で頭を打たれても其の男は平氣である。錢は追々と策の中へ溜る。黃門は暫く思案して居られたが、家來の一人を呼んで「其方、錢を拂つてあの男の傍にある風呂敷包を打つて來い。頭を打つてはならぬぞ」と云はれた。家來は仰せをうけて、件の男の傍に進んだ。見れば風呂敷包が一つあるきりであり他に何も持物はない。家來が金鎚を取つて風呂敷包を打つと、不思議や件の男はだら／＼流れる血汐の頭を双手に押へて、一目散に逃出したと云ふ話はあるないか。

聞法の席に於て、高座の下や演壇の許では、いつも傲慢の頭を叩かれる。

宗教上の話でなくても眞面目な問題なら、随分烈しい鞭撻を受けるのであるけれど、お互に薄ぼんやりして居ることが多い。それどころか、ともすれば對手の話振を批評したり、話の内容を平氣で冷評をさへするといふ有様である。恰度上の大道藝人が、不思議の術を以て、自己の正體を巧に傍の風呂敷の中に隠し置き、ほんの影人形を人の前に出して、打たせて置いたと同じ事である。痛い所を押されても、僞慢の頭を打たれても、自分の正體はちやんと外の所に、高見の見物をして居る。參詣しながらグウくと眠つて面白い夢を見たり、家内の有様を考へたり、其の時々 of 用事を考へたりして、一向に話を聞かぬ。甚だしい場合には何を聞いたか譯の解らぬことさへある。確り叩かれた筈の自分は、金鎚の當らぬ處に隠れて、巧に心の人形を使うて居る。「驚かす甲斐こそなければ群雀、耳なれぬれば鳴子にぞ乗る」。初め鳴る音に驚いた群雀も、狎れては鳴子に止つて平氣で居るばかりか、その鳴子を揺ぶつて音をさして、面白がつて居る。眞に無眼人無耳人と云ふの外はない。如來様の前には隠し立は入らぬ。包物は無用である。風呂敷包から出て、胸の奥から出て、正體を顯し、全心をさらけ出して聞かねばならぬ。罪業深重、煩惱熾盛、永不成佛必墮無間。如何にも嚴しい御意見である。「其の爲に我れ本願を成就した。我に縋れ。我よく汝を護らん」とは何たる御親切ぞ。世にこれ程の痛撃はない。眞面目に聞くならば、我慢の頭は流血淋漓の痛みを覺えるであらう。身も世もあられぬ思に胸迫るであらう。それでも尙且つ安閑として居られるか。「頭がぐらつくやうでなければ薬も利かぬ」と云ふ。このギリぐの處に立至つて、始めて如來の御聲が全身に沁み徹る。かくて如來の御慈悲に生き返り、重荷を降した心地に、胸の奥底から泉の湧くやうに、爽かな元氣を感じる。暖かさを感じる。共に聞法の事が成就するのでありま

す。

~~~~~

光陰くわういんは矢走やばせをわたる舟ふねよりも早はやいと知しれば末すゑを三井寺みゐでら

一 休

分限ぶんげんに栗津あはづにぜぜを使つかふなよ始末堅田しまつかたに辛抱唐崎しんぼうからさき

親 當

浮世うきよをば何なにの絲瓜へちまを思おもへどもぶらりとしては暮くらされもせず

親 當

世よの中なかは絲瓜へちまの皮かはのだんぶくる底そこが抜ぬければ穴あなへどんぶり

一 休